

さくら染め布の色彩分析

—第5報 染色後の処理の影響—

清水尚子・山口律子

本研究は、資源の有効利用ができる染料素材としてさくらの廃材を取り上げ、退色した布を染め直し再利用することも念頭に置き、第1報で小枝と蕾、第2報で緑葉、第3報で黄葉や紅葉と樹の使用部位の違いによる染色性の差異について比較検討を行った。次に、第4報では抽出液の酸化方法の違いについて、数日間放置した染液よりも再沸騰と放置を繰り返した染液で染色した方が、花のイメージに相応しいピンク系やローズ系の赤い色に近づくことが分った。続く本報では、染色工程の最終段階で行う媒染などの後処理の違いが染色布の発色に及ぼす影響について比較検討を行った結果、アルカリ浸漬処理で良好な赤みが得られることが分った。

介助導尿施行における主介護者の介護負担度調査

松 田 久 雄

介助導尿をおこなっている主介護者40名（男性9名、女性31名）およびカテーテル留置で経過観察している13名を対象にアンケート調査おこない、J-Zarit Burden Interview（以下J-ZBI）による介護負担感および介助導尿についての社会認識の調査をおこなった。その結果、J-ZBI得点の検討においてカテーテル留置群よりも介助導尿群に介護負担感が高かった。またJ-ZBI各項目の得点平均を比較検討した結果では、「患者の将来が不安になるか」についての項目では、57歳未満群で有意に高くなった。介助導尿などの医療的ケアの制度を変更することに関する質問に対し、57歳未満群の主介護者の67%が法改正を希望した。

介助導尿を施行している57歳未満の主介護者では、将来に対して不安が強く、今後相対的不安についての考察が必要となってくると考えられた。また今後の介助導尿などの医療的ケアに関しても専門職に任せたいという希望が表れていた。

世帯属性からみた幼老交流意識の要因分析

片山千佳・小川雅司・河村圭子

近年、核家族化と少子化の進行により、地域や家庭内で自然と行われてきた高齢者と子どもとの相互交流（幼老交流）が減少したため、幼老交流がプログラムとして各地で実施されるようになった。本稿では、大阪府内の保育園に通う幼児の保護者を対象に社会調査を実施し、先行研究では少ない定量分析によって、世帯属性の観点から、幼老交流に対する保護者意識について明らかにすることを試みた。分析の結果、幼老交流に対する意識の代理変数である「幼老交流の経験有無」は義父母同居ダミー、子ども複数ダミー、母親の年齢階級によって説明ができ、義父母と同居するほど、子どもが複数であるほど、母親の年齢が高いほど、幼老交流に積極的に関わる傾向にあることが明らかとなった。